

プログラム・ノート

青澤隆明

第2次世界大戦の終結から10年目を迎え、1954年に神奈川県立音楽堂は開館した。この音楽専門ホールには、無数の演奏会を通じて、それだけの音楽が滲み込んでいることになる。ピアノだけでどれほどの音が響いたか、考えるだけでも気が遠くなりそうだ。

エリソ・ヴィルサラゼは少々意外なことに、今回が音楽堂に初登場となる。彼女を導いた先達、スヴァトスラフ・リヒテルもエミール・ギレリスも、ここでリサイタルをひらいている。

気になったので、ロシア・ピアノリズムの鉱脈に連なるピアニストの音楽堂での足跡を少しだけ辿ってみると、1960年代にはヤコフ・フリエール、ドミトリー・バシキーロフ、ウラディーミル・アシュケナージ、70年代にはリヒテル、ギレリス、グレゴリー・ソコロフ、タチアナ・ニコライエワ、ドミトリー・アレクセーエフ、ディーナ・ヨッフフェ、80年代にはラドゥル・ブー、ダン・タイ・ソン、タチアナ・シェパノフ、ペラ・ダヴィドヴィッチ、ミハイル・プレトニョフ、ラザール・ベルマン、90年代にはコンスタンチン・リフシッツ……ほか錚々たるピアニストがリサイタルで次々に初登場している。そして、2020年代が始まり、ようやくにしてヴィルサラゼが、その奥深い成熟と真価を聴かせることになるわけだ。

エリソ・ヴィルサラゼは現代の聴き手にとって、過去から未来を照らす、力強い灯台のような存在である。厳しく、激しく、決して甘くないがやさしい光が、そこからくっきりと大地のほうへと延びてくる。ロシア・ピアノリズムの黄金時代に愛された少女として、また巨匠たちの若き同志として、そしてきたるべきピアニストたちにとっての敬愛する手本としても道場としても、ヴィルサラゼが伝えてきた音楽の強さと大きさは計り知れない。

2010年代半ばから足繁く日本を訪れるようになり、演奏や教育に汲み尽きせぬ情熱を注ぐ彼女だが、近年のリサイタルではウィーン古典派やドイツ・ロマン派、そしてショパンの作品に集中してきた。

今回のプログラムではようやくにしてロシアの作品が登場、しかもベテルブルクゆかりの偉才が顔を合わすことになる。繊細で優美なチャイコフスキーから、恐るべき鋭気を放つ若きプロコフィエフへと、急転回をするようにもみえる。そこからプログラム後半は時代を遡って、ヴィルサラゼが深く愛するシューマンの独創へと踏みこんでいく。多種多様な、目くるめく流れである。



チャイコフスキー：『四季』 op.37bis

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）の『四季—12の性格的小品』は、作曲家の本拠地ベテルブルクで新たに創刊された月刊誌の企画に応じて作曲された。月ごとに相応しいロシアの詩を選び、チャイコフスキーが曲を寄せるという連載を通じて、1875年12月から76年11月にわたって順次発表されていった。全曲の出版は1885年で、同時期に出版されたト長調の「大ソナタ」op.37と区別し、op.37bisまたはop.37aの作品番号が用いられる。

エピソードとして掲げられたプーシキン、マイコフ、ネクラースフ、ジュコフスキーらの詩行と親しく響き合うように、チャイコフスキー天性の感傷的な旋律、精妙な和声やリズムが調和して、ロシアの情緒が密やかに美しく歌い上げられていく。曲は平明な3部形式で書かれ、オーケストラのさまざまな楽器も想起させる響きが、細やかな色彩で随所に鏤められている。

12の小品は順に、「1月 炉端にて」イ長調、「2月 謝肉祭」ニ長調、「3月 ひばりの歌」ト短調、「4月 松雪草」変ロ長調、「5月 白夜」ト長調、「6月 舟歌」ト短調、「7月 草刈り人の歌」変ホ長調、「8月 収穫」ロ短調、「9月 狩り」ト長調、「10月 秋の歌」ニ短調、「11月 トロイカ」ホ長調、「12月 クリスマス週間」変イ長調。

プロコフィエフ：『サルカズム（風刺）』 op.17／トッカータ op.11

ペテルブルク音楽院で学ぶセルゲイ・プロコフィエフ(1891~1953)が、モダニズムの鬼才として荒々しく鋭気を放った初期の代表作、トッカータop.11と『サルカズム（風刺）』op.17、は卓越したピアニストである作曲家自身が1916年にあわせて初演した。

『サルカズム』op.17は1912年から14年にかけて作曲された挑発的な問題作。自嘲を含むアイロニーや厭世的な絶望が、人工的な鋭角性とリズム、激情と緊張をもってグロテスクかつ尖鋭的に描かれている。「テンペストーソ」、「アレグロ・ルバート」、「アレグロ・プレチピタート」、「スマニオーソ」、「プレチピトシモ」の5曲構成。

トッカータop.11は1912年の作曲。シューマンの同名曲に触発されたというが、こちらは抒情を排し、モーターのような機動性と不遜な嘲笑を結合した、大胆かつ性急な作品。簡潔な音型動機を活用、対位法的な処理を伴いつつ、激しい強弱変化と無窮動ふうのリズムのなかで自律的に運動させていく。曲は、アレグロ・マルカート、4分の2拍子。ニ短調の調号で書かれ、二音の同音連打で始まる。左右の手の重なりや交差も、鮮やかに躍動感を生み出していく。

シューマン：『ノヴェレッテン』 op.21から 第8曲 嬰へ短調

ドイツ・ロマン主義音楽の象徴的な存在、ロベルト・シューマン(1810～56)の『ノヴェレッテン』op.21は、3部形式やロンド形式をとる8篇構成の曲集。1838年1月から4月までの短期間に書かれ、第8曲は夏まで推敲を重ねたとみられている。シェイクスピアの『マクベス』やゲーテの『エグモント』に心動かされていた時期の創作で、ノヴェッレ(小説)との関連を示唆する題名をもち、曲の叙述は細かく分断され拡散していく。

ノヴェレッテ第8曲は「きわめて生き生きと 嬰へ短調、4分の2拍子」で、曲集のもうひとつの中心をなす第1曲と同じく、際限のない変化を続けていくように叙述される。4分音符で上行する主要主題が声部や調性を変えて展開を続け、「遠き彼方からの声」と記された下行旋律に受け渡される。トリオI(変ニ長調)、第1部の再現(嬰へ短調)、トリオII(ニ長調)へ進み、その終盤「遠き彼方からの声」で旋律が静かに下行。それから「つづき」と題された部に入り、トリオIIを回想してアダージョで落ち着くと、4分の3拍子に変化して「つづきと終結」のパートが全曲をしめくくる。

シューマン：幻想曲 八長調 op.17

シューマンの悩み多き20代、1836年に着手された本作は、作曲の契機をはじめ、旋律の引用という意味でもシューマンのベートーヴェン受容を色濃く示した名作である。

まずピアノ・ソナタとして構想されたが、様々に手を加えられた結果、ロマン派小品集と形式的な融合をみて、「幻想曲 op.17」の題で1839年春に出版。彼女の父に交際を妨げられた時期にクララ・ヴィークに捧げるつもりで書き始められ、当初はボン市のベートーヴェン記念碑設立に協力すべく《フロレスタンとオイゼビウスによる大ソナタ、ベートーヴェンの記念のためのオーバーレン（捧げもの、少額の寄付の意）op.12》という標題が付されていた。

第1楽章の終わりにはベートーヴェンの連作歌曲《遙かな恋人に寄せて》op.98の第6曲冒頭の旋律が姿をあらわすが、尊敬する先達への鋭い意識はその和声においても、幻想的な主調の回避や不協和の解決を遅らせて調性をぼかす工夫を含め、随所に顕れている。

曲は以下の3つの部分で構成され、それぞれドイツ語によるロマン派的な指示が記されている。「どこまでも幻想的に、情熱的に演奏すること」八長調、「中庸の速さで。どこまでも精力的に」変ホ長調、「ゆっくりゆったりと。徹底して静けさを保って」八長調。